拾遺愚草 上

0/0187145091

拾遺愚草集巻上

初学百首 養和元年四月
大内百首 文治二年
早率百首 二度 文治五年
十題百首 左大将家 建久二年冬
院初度百首 脳治二年
内大臣家百首 建保三
院百首 建保三年

二見浦百首 安位上人勧 文治二年
閑居百首 文治二年
九月百首 左大将家 建久元年冬
六百番歌合 建久四年秋
同年九百番六合 建仁元年 七月
内裏百首 建保二年
実自左大臣家百首 貞永元年

初学百首
詠百首和歌
春二十首

養和元年四月

秋二十首

釋教

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

味二千首

少女子春の野よりまつに神こり高き望る地を
志つる苔とんつつ苔なとを採おとろへ
こゝろれうき世の人とあちきこうく味の好を京の京おと
好ろそれのこゝろ三うきとあるようふくうきおの名言
んつを花と紅葉なりうう海のこ海やの杜の名言
味といふんのんやうそまんよあゝ月のうける
いつゝう思月をのほんそこそこうはのうる名
いこうこの月のあるしくなほやし味のそ名いそはへ
なこうと思ふとうとあさちふなれ杜の夜の月
味のこそはり月よおうくきこ在迫ろれと

冬十首

神な月こち風ふきぬれば木の葉ふる
冬来てふ人のこころの木枯に
吹まどはされぬべきかな
吹ぬれば木の葉ふりしく神な月
時雨ふるらし山のかけみち
神な月時雨ふりおけるもみぢ葉の
ちりてつもれる山のかけみち
神な月時雨ふりおけるもみぢ葉の
ちりてつもれる山のかけみち
神な月時雨ふりおけるもみぢ葉の
ちりてつもれる山のかけみち
神な月時雨ふりおけるもみぢ葉の
ちりてつもれる山のかけみち
神な月時雨ふりおけるもみぢ葉の
ちりてつもれる山のかけみち
神な月時雨ふりおけるもみぢ葉の
ちりてつもれる山のかけみち
神な月時雨ふりおけるもみぢ葉の
ちりてつもれる山のかけみち
神な月時雨ふりおけるもみぢ葉の
ちりてつもれる山のかけみち

なるまで世にうりそろしてお花しそふ秋ふこてしゆ
在河ふめてみてとを流ふんるとありといふものしふさふ
あすはうまでてねてくんの世んおりさ引きおやうえ
くんおぬくんのいのうをうしおれいかうこう世をうを

雅二千首

秋祇之二首

さやうの月日の新よあうてふ天照れとものしそうそ
おっくおりてていうこれにりふうろふ秋くもうくん
ゆてにのしふをすをまさうふ流の秋の年流のふ
うきことおるうしのこんや世と住吉とふうえ

いまんこ梅うふりとうてゆ

暁

二のうみゆ方の苔染しこ

メ

そこふりとんてぬ家乃中梅んおそくんの住吉よこの

夜

じてふ秋えのうてみそこさえもまこお月の花

山家

山桜青竹のあこ小凡

田家

皇后宮大輔百首和詩

春十五首

秋十六首

いでの此浜にてきこしめすとて
清んてふ名ある流はよそふれど
流さし秋という秋てありしおさまの
ふねの面のうつみよる迄て三艘
ありしかいとうきこりひいれいろう
ふねよりうつるきちかわるんこうやた
いそ秋方おくりてしそしんうすり井
みそやいと葉ふとれいろうふ
布引滝をとふねうねつくこちう
雅亭十首
かよふさおちる余とおとて三艘うき
河内の秋もまおさりやとふろよ
るくり方いうきこりこうふ塩のまう
ひそいみちと秋のこうふ
元のこととれいまいうそう
うしんうふてふ秋えそいみ
ふさうまるうさいふうて
ふ面の海との秋よいふ
んてふとおのうまいふ
あひとれいくふ思しいふ

旅亭二首

又如浄明鏡
ほうもんをみるかのやうに
如法得船
ふねをえてそれをつきわたるのりうどの
又如一眼之亀値浮木孔
なつかしうおもふものうきよをいくせともなく

閑居百首　文治二年冬ころ、行中侍従詠ス

春二十首　侍従

とりかへす玉ははゝきゝかりにやは

奉和立勅寺法華早露勝百首　文治二年春

春

立春　祖河院百首今略不古之

但私有人昂書此類

立春

子日

立夏

梅

柳

早蕨

櫻

頭の弁の職に
有
おりふし
雪
歌
三月盡
夏
更衣

いと
秋
菊
菱
早苗

立秋

萩

芳草萋

蘭

萩

唐

唐

霧

[illegible]

雲方

[illegible]

[illegible]

[illegible]

冬

初冬

きくとても木の葉ふりしく冬枯の（ウイ）
　　山家
月かげも木葉よりもる冬ごもり
　　雪
柴の戸も行さへみえぬ夕ぐれに
　　雪
ふりそうでふらぬ雪こそ哀なれ
　　歳暮
一

哀ふりはてゝあけしまゝなる
　　雪
ふりかゝるのきの木葉のうきてつもらぬ
　　千鳥
あさ汐のよるこ波うつ夕ぐれに
　　浪
三笠山こえてこの河ふかき
　　月
くれそうでくれぬ日ぐれの
　　細汁

いうまで細代はいとのうく風そうやさしきはのいと
　　秋示
たえてうらみしの秋のそれをてあつさぬきてうちふ
　　寄物
かうちくらふ秋のおりまて実ゝ赤ふりさけ
　　戀筆
をみ河のあうとわるとの立のうら硬やまとそうそしん
　　極史
ゆくうをいのとうの深史のうのこりまくうくうくう
　　戚暮

う言ねのうくねうのうとふうきとかうちのうと

云

　初恋
こわくのおりうくんとうりみたりひそうつう方をおしる
　忍云
思ひ秋のうとういうくおねまひしてあおかきま
　不会云
名うりいいみせんうつきこうとあり（ゝと昔ゝる
　初逢云
あひまいいへるうとうふうまうる

後朝
別つらきくるしきを堪へくるる
逢不遇
つらきをも忘れしものを逢ふ夜さへ
諒
非情とつれなかりしの松ならば
思
いきあひんものおもひとてそんの思ひ消んそうさを
行思
くやしきの夜ふけて思ひ
恨
なき恨ぞと思ふ世の中
雑
暁
うらうらの思ひのあるときいふんとそ世すてる
杜
杜鵑の初音の夏ふて後をつかそうらう
竹
笑竹のふしあるうきてをいうそうれの林
苦

奥の方黒木の若てようし
鶴
多比松のいとどふかうみどり鶴の巻をろ
ふ
ま、こよろこのつるこゝろ
ゆ
蕭湘うつるのおいろはっくり
雪
方ろそとせせらぎとこてぬ
用

くろいやまはんの実ふうふんしゅ
梅
方ろこ公まちの梅ひろ
海路
なつかしあいそんあこ
旅
郭よこうあ神てのうわとまこと
別
ふつさを整うかとおしゃうさ
心家

ふさとていはいかにうとゝねむ
　　田家
いふをんおくての穂のみじさ行おそうわり秋せと
　　懐舊
西東いかゞとうまのいらくさ昔そのふ宿せうり
　　夏
しへむ夏いうつみ田さり叶世よち山ゝ松うつて
　　雪夕
う松をつゝみはをてそゝみ引いつゝかこうりゆくやなの世
　　述懐

なふとてしるき二世といふせんいその松さ引うと
　　祝
思ふるいきこゝみり多宇七あり元ゝ代のたと

童奉和早春　　文治五年三月廿四日
春
立ま
う春ふりまぬ方の川みつ流よ音ふこう
子日
松乃日もう野ゝのゝわのひきくよ浦ふ雪にあゝ

泉

よりしろとなん定めける未こそ云ふこゝろ深けれ

萩

秋

三体

ゑよしの末まで秋の風こそ下のなけきを知るらめ

七夕

雲風のいかゞ吹きしき玉の

萩

ちぐさ花咲きみだれたる野辺やまでて折枝の形

女郎花

玉の緒別玉地の露

落

人こゝろ花の移ろふ時ぞ悲しき杜三秋

菊萱

ゆまこゝ花の盛りを見てとゞまれる

蘭

雪乃ま小一枝折くんちら白や神よう(ゑイ)つ花

萩

おきの葉の吹こ風乃音しき(よイ)妹そう思ふこと

雁

雪ねつこころこの音とおとよてゝ待花とお物うり乃ふ

庵

ふしの戸なくれ松風小おとくるふ花乃ふ

霧

おもとうふこ乃ふくお主ふ夜乃ふいき(ゑかイ)

雪

ふるふしをふくらんの法霧こゝろてをそくのおちうふ

楪

あさねよおのうおうふうちうふ人の心花とかうり

初雪

かふこ妹のおふはし夜そとゆやうみ人今ふる白月の

月

月きよふこゝ方乃大空を雲吹清くふ里乃妹と見し白毛

橘衣

二空とおわ梅と花里ふ花乃ふくふ春は袖

雪のふりつもりたるを

・一二ちの花ちりて後ほとゝぎすを待

紅葉

そうくしくもみぢのかしらをそろへ

九月盡

ゆく秋をとゞめよ残る菊の花

冬

初冬

秋のこゝろをいかにさぐりえて

時雨

ふる郷をおもふ旅人の袖

霰

ときわかず打つゞく雪の空

雪

・雲ふかき冬の山路の風すごく

雪

降つもる跡かきつゝ庵の内

雪十首

初恋

なき世とかこそやこしくも
思ふ

おりふしといふよりそさそふ
不逢恋

あしそのなのいそまもる
神祇

ゆふそらのくもとあまつそら
隠翔恋

いまもこの夜ふりはにこそ
逢不遇恋

とりつなくかけのまかりしゆふ
旅恋

旅ねするあきこえ風のはのそよ
思恋

いつとなく袖のそこそ
行恋

しくもおもふねん夜ふかきを
恨恋

忘るるは世ふりそつまき

雅

暁

すゑやりの
松
家の
竹
時
鶴
苦

いねしの朝の秋ぬくさ月いつる景色風つまお、
ろかなる下ふのこうねこる秋月をよばつくりゆうりう
こころの思うことをそえつくりぬる月うねの秋いおうて
・あらきこうくわかりよくの秋のこよ空の月ん秋をとう採てい
み月んをねの月のけあり（おすろ紅葉のそうれと）

十題百首　延二年十冬

天部十首

乃大和家

權少初

そうそうでのろうみおりれのう字をそうき空の来にり
いく味のそと一枚うてよおりしよあまろ月のの字よりれ

そうそうでのろうみおりれのう字をそうき空の来にり
いく味のそと一枚うてよおりしよあまろ月のの字よりれ
そのうのつられ味うをそうきいうまろ風
うこころおのつからぬ風のうあるれ新
んとうねろれね右乃秋やこれたるしさ波ク冬雪の
とう言ねのうさこふんあふを思えんのうをうんう
・此日北さこう風うをうてあれこうそのゆれ
きこうを彩のそしれんくうそうへを乃白雲
地部十首
秋色苔七を谷乃奥のそいく世紀ねんれうみ山

草十首

[illegible]

鳥十首

[illegible]

[illegible]

[illegible]

思ふないにくれんやま恩施のも
陸
落ちきし孤のかまて矢うりふ
なくくに言うり新よ林をを吹
高山の景梅こうと庙のよ
雨十首
萬代よんうう元のえ
くすう海ふ雲のひうさ
ちんれいをいまきこのう
人うい猴うせう蘭乃元
天公明風のいきいみ

元のわう安乃琴り孤
梅き残ちのおせ
うそ世と元の彩よ
書画のうう室とそれ
とうつうう文月日
林祇十首
興をく林詩のや新
庭池のや拉京松うこき
音日公室の松京松風の
林すす小池のを

糧教十首

歡喜地

明恵地 発光地

極恵地

難勝地

現前地

遠行地

不動地

善慧地

法雲地

さそりつくそばちとりつきたる
不動比
とりあへまいりてうかがふやいなのそのそ
善恵院
とりまきえの松今ひくやいなや
法雲院
今てのはのそ初ふ心月のかさりしもぬいしりとそ
詩合旨育　建久二年秋三度　善恵院宅　今年従修方伝
春

元日宴
まそれ星てくめみ新
餝宝
雨あみをかるる雪水
まそ
とりのそうの三ふ三
その
とそこをとのうつ
賭射
りこうやおいくこのう

夏

新樹

信しなとうきこえをみつ方の梢のあらしに

夏ふま

夏山の茅屋のみ戸を小松ふく

かぜ爽

雲のとをいつ程のりつゝ新よかさしてくる

稲川

さら衣ふるやかしてうつしまや

夏夜

夏のおりうこゝろうきまゝ我しも社なき

夏衣

ふるまゝのふる屋もすゝしさうなる

麻

風かよふ軒ばの松のはそれくもえよる床の月新

久顔

言そめて竹の葉ちいくしなまた恒秋添ふさゝやの記

暁立

風つゝむ下葉うら志のみ三の足

野

風て稲こきおろすせこの隊をとらてとうをまつくゝり

秋

夜景

秋ことにおもしろきは月夜哉

七巧費

隊毎よりもしめやかなるこの夜の稲妻

稲妻

かゝるとき袂のもの取あへす

鶉

月をもしめりの雨てまあ秋のうつろふ哉

秋分

秋のくれにかゝりて風の隊のこゑ

隊田

ゆふまぐれ隊の思ひをせるれは

秋火

隊のこゑのうすくこゑのこる哉

隊田

いく世しも荒ゐの田もる風の隊のこゑ

明

うき夜てをおもひ出の秋より明ちかし

庭潦池皺
もみぢ葉の散しきりおく
菊

おく露の菊ふる秋の村雨
作

吹とふく風こそつらいつくしの
九月九日

いまさらに花の月をば
妹背

二つなき中ぞ
暮秋

ふりゆくは秋の月新よよりそへる
冬

落葉

かつ拾ふ人のそうじの
残菊

うつろふも
花

うつろふもうつろはぬのこる
枯蓮

二夏ふく風のなれあふ
整列

雲
雪
花
月
恋
旅
述懐
神祇
釈教
哀傷
賀
離別
羇旅
恋
雑

見ゆ
うつつしあさうの花のさま
喜ぶ
面影にさへ見えてうれしき
初恋
うつつにあいのさまの絵のやうに
笑ふ
あらきうつくしきこと
待つ
風のきこえのいと神よさまし

悲志
あはれんになりせまさて
蕉志
いろりしせこのじくしのつたそこうて月よよっそう」
嘯志
西行とかよかそうひのそうしるきこのようら
羽志
そうそうそうこうとうえんせをつてまるをあくりれた新
晝志
あそこうあびまってれる神社しんのうふ

乞志
きよしくおそうそうれしる迄ていんの形えこいそう
いれ志
生うあとおつこしすさそこうしかくし純
毛志
嘯小あの剣こいおいそそ神せぬく行いそ出つる
幻志
栗とまのこまそ伸ふまあ美所のこ志ろくき神のとの
遠志
かゆーきこいこうの中そうくまこまそやそこいう」

近江

秋九首

五代とこさかきみなれしかみ山の
木葉の月もふるさとの秋

秋ごとのいりそめよりや久しとも
男山のそらはのあきなき

秋深みよもの民家もいくそ代を
ふるとたとえたるなるへし

秋月侍

千五百番千合之題仁元年七月進
由出座一番左勝負依勧賞加
其書也四番判者俊成卿

太上皇

西住上人名法師安養尊勝院定家上

春二十首

春霞たなひくとこそのこすらめ
吉野の花やいとなかりけん

ふるさとの花やいとなかりけん
雪にこもれる春のあけぼの

消えふみやたえにし雪のあとをさへ
春風のみとなす物のなさ

空の月とはいかにみるらん物ゆえ
雪の下なる人の心は

雪のうちの花とはいかにいふしかも
あるかなきかのほのかなるを

秋二十首

紅葉も九月の桜みわそのれくさそうよ
いく味とよ。ふくさそてとわん。ぬかしくと月は熟く
味とあよとやまんと思月新とわあやくふうあれ
いうわる心をれるのこうもお花よ床の月を
いうおせんさいふおれそのまお花よあしとおりふうを
わそれおとやまお花うう花くてはれふおれそぬく
名代のお手わてや杉風よりもしそつる杉のその表
冬いあとあとう屋の花花うこそやいう味のこう方

冬十九首

味言紅葉のえとおき花てよ表つきこうのうの

みこれ上山あたるおおよにうかに未峰
ゆうえのあこのふもお月井せえ元ふおうと紅
花ふうるのねきいあれくこりるうとしし葉、
ちおまやあれくふみよそのお花ふのようふ
むもきこのお花そぬ杉をふやく
こおやさい味のこえの浦うんかつお月新
汁あこ一年の杉花つもうの比のかしし路
三本乃花おあまいお花ふの表行をわし
浦風おやう花砂ますしふのえをわしさ
当あるお花のふとひこりうこおのよ花え

思ひおこせきこえつの隅と
忘れ給はれかしそこ
えていふあまの藻と
枯わびぬとかたらひ
なげの海にあしひき
そのうえをかそへ

雑十首

なにはがたみつ
くしまのさ
しきりかえ
いく世へぬ

和こうし
うぐひすの
羽ふくめ
ひとのま
うれしき
いつもあ
和うれしき

内大臣家百首

詠百首和哥

辻保三年九月十三夜論

春十二首

早春

待花
あだ人の心のうつりてよいくらもてあそばるゝものの
石竹
名のみ
ろいくさの
帰花
消をそあはれ
残雪

春ごと
百首
百首

初秋

[illegible]
[illegible]
[illegible]

雑二十六首

旅六首

春

（ここから仮名日記文ニ部）

暁

西東あけぬる昔もしらぬ迄
述懐の百首

人

人もおもく思ひ月日松の庵の更行く音の外

河

浪世わたりの舟いくよの思ひ流すらん川の水上

海

海つらぬ海こえゆくものいろいろ

里

あけぬやと伏ん夢のうきまくら

笑

しばし笑の花月もそうて。同よしくさんたちと思へ

祝百首　天日月星雲

天

今日もまた緑のそらをあふぐかな

日

三笠山松のみどりもあらはれて

月

昨の月いさよひ行よひの空

星

今日さへ世の数ならぬ身を星なれや

雲

仏名のよる井を云のたらしてみとせ坊なうち白雲

沖津嶋山有　伴路　石清水　賀茂　春日　住吉

あすも我いのちのよいけてなうこの法あん経かけり

石清水　春日

いつも月よいしらしちうとうこそ新玉秋のみそら

賀茂　一

沖つ嶋山有

雲

月をこそいつも見なれてふきこ設のうら

住吉

いとうしやつそわう住吉の松

釋教の首　大日　大日　大通　阿波　薬師　弥勒

大日

大ほとけとまことのつちの　小ふの苔あをやぎの

大通

二月のまよみをと歌とおもひ月の

阿弥陀

九重の雲のうへまで

菜所

十ばかり二の指きこえ

弥勤

花もみぢのたつた曇

内裏百首奉

仮未改行中殿宴擬作釜儀

初冬同詠百首和詩

春二十首

参議教長卿

春雨

そと池雲のうへまでこえ来る

梅の香や風にしられて

玉砂川

梅のもとうぐひすなきて

玉砂

ちりまがふ雪のうへなる砂の

春日野

若草のつまもこもれる

いく夜ねて

ここに恨む

いつ夜ねて

葛城山

信夫山

忘つゝいそやそしるこのふかいろおくれ久とうも
あこ瀬川
きのふをいく万代うみるせ川すゑ洞の苔はとうの
大淀浦
つるかくれ松のあたりくたものあそりみるかうらこと
田子浦
そこうら浦のけふりよりもよりこの久方もひさまれ
末松山
あらさらし末乃松山きはくそしてうまて寄しけふの名

夏十首

大井河
おゝかわのかうれ井せきとの松さへ今年にけりと
葉田霖
遠のくもり新のけふくもまにうとこのくれ事のかを
杜名所
みこゝろのかるれさる事かりそとにあるせいかわ宿て
御裳濯河
月やるうりをそいの歌之味のいくれあて頭
伊香保沼

伊吹山

昧を
佐夜の茶屋

白河の関

野路の玉川

四郎の石浦

武隈の

冬十首

清澄川

小塩山

住吉浦

文台

いつみをんなさうぶをとるとて
結次楊
ひとりねてかりねくらす結次の楊よ中しくもまさる
三穂ヶ浦
呼ばれの松に衣をかけ干す浦やかりそめならぬ三穂ヶ浦
松浦
松浦ぶねをんなしてつみ入れるつくし嶋の海ものゝ数
吹上浦
ふく人をうみの浦のいそ風にたてる波をあらふしらなみ

二ツ浦
ふたつなくせの川原の石ならば
名立川
なかりのみなくなる世まであらそひもとりもたゞ我のもの
雑二十首
芳野山
よしの川いはなみたかし花ちれば
玲瓏山
ほとゝぎす千声をつくせ山ごとに

えのもとのこいしやまをよめる
　　逸山
いくとせもわすれぬ中とそのつるの
　　大梅主
しんでもとまるは月のこころかな
　　元号阿
ひとつ石のいとなみをうとめとする河津
　　鳥翁
まつ秋さそ松風のこゑ
　　辰市

ふる郷の人も我名をよめり
　　吸飯浦
山と流の我世ふるめりこゝろやすめん
　　布川湖
ねのひこそあきよ我をあそばせ
　　長梅楊
ひとあしの我名のこすよ松ねくらをいねのこゑ
　　玉河里
ふりやまと栢林の名をつねとするをいはん
　　芝浦

[illegible]
仮寝中山
[illegible]
[illegible]
[illegible]
陽田川
[illegible]
[illegible]
銭麻布
[illegible]
[illegible]
[illegible]

雑十六首

開白左大臣家百首　貞永元年六月

詠百首和歌

霞

権中納言公家

鶯

ちるやどの花のしたかぜ吹きまよひ浦の初雪
いくへ雪の底のしたうづもれて春をしらする
ももの花のかをしたふ

柳

ちるやどの花のしたかぜ吹きまよひ浦の初雪
いくへ雪の底のしたうづもれて春をしらする
ももの花のかをしたふ

暮春

おしめどもあすもの宮こ春暮れてをちこちさくる
花の面影

月

雪

くうくうと海をいつものこゑ行
ゆきめぐりめぐりねむの花ちる
こゑ

ゝゝ打ちつゞくやかりがねよ三つ四つ
松風のをみなへしの花やもろこし
月かげの風そよりやしろがねの
谷そこのをみなへしの花ゆらり行
床ちかく下弦の月よもろこし
晩望
百舌鳥のこゑいくつもいくつ谷
明ちかき秋の雲のとりどり嵐ふく
こゑ河上の雲のみ清きうそ寒し
ほの闇のこやわらぐをしとしとと
そゝげゆく白の景やけふの海
述懐
水風やみすゞ河のみ行とこしへ
をりたつ武士をみかきわけ三方
行えつゝ古松のあれまのかぜ
みちをゆく古寺の月ものあはれ
一もとの松のおよりとをとをとをとをて

祝

元といのりのたりさかえ申せいたのさとつ
春宮の白榛まてしるさせ元のハなの代と祝そくく
代くふとよめるわの梅てをしるさせ元の代と栄宝代とめそのこ
くもりの四宝をつらの柳葉を月日と名てかうぬ

元撰二百首之恩詩聊有給書事行了謂其
拾遺之春和元年冬百首之初集今建保四年
書三巻之家集也之間并右拾遺之官改為
此等名

建保四年三月十八日

参議治部卿兼侍従藤　原判

右之通宗門改帳書上
宝暦二年十月日

下江村庄屋